

はしがき

社会学という学問が、「社会についての学問」であることは言うまでもありません。しかし「社会についての学問だ」と言った瞬間に、「それでは社会とは何か」という問いが生まれます。

この問いに対して、平明な言葉で答えると、「私が他者と出会うところに社会は成立しており、それこそが社会なのだ」ということになります。しかし他者と出会うことは、お互いにいたわりあう側面をもつ一方で、お互いに傷つけあう側面ももっています。私という存在を大切にすることは、ヒトという動物にとって、生命を維持するための原初的な営みです。遺伝子レベルであれ、感情レベルであれ、私と他者とは違うという認識のもとに、自己の生命を維持する営みがなされていきます。

このように私（自己）と他者との関係はアンビバレント（両価的）な関係として存在しています。つまり他者は、あるときはうとましい存在でありながらも、またあるときは必要な存在でもあるのです。

以上のように考えるとすれば、社会学は、「私と他者との関係として成立した社会もしくは社会現象」を研究対象とする学問だということになるでしょう。

19世紀前半にフランスの社会学者コントが「社会学 (sociologie)」という言葉を用いたことをもって、社会学の誕生とみなすならば、社会学という学問の営みは、すでに200年近くになります。

約200年間にわたる社会学の歴史において、偉大な社会学者たちの研究には共通する3つの特徴があります。第1は、社会学の研究対象が、いまここにある社会もしくはいまここで起きている社会現象にあることです。19世紀初頭の社会学草創期の社会学者たちは、大きな変動の真っ只中にあった当時の西欧近代社会を直視することを通して、社会の仕組みを解明しようとしてきました。第2は、社会学的な見方もしくは社会学的な思考を示すことによって、社会学の方法を明確にしていることです。第3は、第1の特徴とも関連しますが、

私たちがいま生きている社会の解明を出発点にして、他の社会も含む「社会一般」の理解を可能にするような説明図式の構築（すなわち社会学理論の構築）が、概念構成と命題構成という2つの水準によってなされていることです。

この第3の点については、この本の第I部「6 概念構成と命題構成」で詳しく説明しているのですが、概念構成とは、対象を的確にとらえた概念を作り出すことであり、命題構成とは、概念間の関連もしくは要因間の関連を明らかにすることです。概念構成によって、社会現象の解像度を上げる概念を作り出すことは、現実の社会を的確にとらえることを可能にしますし、これまでとは異なる社会の見方を獲得することを可能にします。これに対して、命題構成とは、概念間の関連もしくは要因間の関連を因果関係として定式化することと社会の変動の趨勢を明らかにすることです。つまり社会もしくは社会現象を作動させるメカニズムの解明と、そのトレンドの分析を通して将来を予測することとをめざしています。

たしかに厳格な科学哲学の立場からすれば、トレンドに関する命題（趨勢命題）は記述言明であり、法則命題ではないということになるかもしれません。しかし社会学の研究においては、理論構築の第一歩として、トレンドに関する命題を位置づけるのが適切でしょう。

19世紀初頭に西欧で開花した社会学は、19世紀末には大西洋を渡りアメリカでも展開するようになりました。20世紀に入り、第二次世界大戦後の「バックス・アメリカーナ（アメリカの覇権）」の時代には、アメリカを中心にして社会学が発展していきました。日本においても、1950年代頃からアメリカの社会学が流入し、アメリカ社会学を学ぶことが「社会学を学ぶこと」と同一視されるような雰囲気がありました。1989年のあの「ベルリンの壁」崩壊に象徴される冷戦構造の終焉と相前後して生じたのが、社会学の多極化です。たとえば、ギデンズ（イギリス）、ブルデュー（フランス）、ルーマン、ハーバマス、ベック（ドイツ）といったヨーロッパの社会学者が注目を集めるようになったのは、その一つの証左でしょう。その結果、現在では、世界の各地で社会学の研究がなされるようになってきました。

この本では、社会学の誕生以来、200年間にわたって社会学者たちが挑んできた研究の中で、現在の社会学においても生命力を有するものを、70の項目

として取り上げ、そのエッセンスを簡明に説明することを試みました。

またこの本は、先ほど述べた偉大な社会学者たちの研究に共通する3つの特徴のうちの、第2の特徴と第3の特徴に焦点をあわせて、「第Ⅰ部 社会学の方法」「第Ⅱ部 概念構成——概念によって社会をとらえなおす」「第Ⅲ部 命題構成——社会のメカニズムとトレンド」という3部構成にしています。

社会もしくは社会現象を分析する「力」を、70の項目に凝縮してみたつもりです。社会学をはじめて学ぶ人にとっても、これから本格的に極めたいと考えている人にとっても、この本が「力」になることを願ってやみません。

この本を作成するにあたり、編集を担当された有斐閣書籍編集第2部の松井智恵子さんと四竈佑介さんにたいへんお世話になりました。心より感謝申し上げます。

2017年3月

友枝 敏雄
浜 日出夫
山田真茂留

執筆者紹介

(執筆順)

ともえだ としお
友枝 敏雄 編者, 1 ~ 8, 56
大阪大学未来戦略機構特任教授

はま ひで お
浜 日出夫 編者, 10, 14, 16, 44
慶應義塾大学文学部教授

やまだ まもる
山田真茂留 編者, 19, 21, 68, 69
早稲田大学文学学術院教授

あさ の としひこ
浅野 智彦 9, 33
東京学芸大学教育学部教授

はな の ひろやす
花野 裕康 11, 13
筑紫女学園大学現代社会学部准教授

さとう しげき
佐藤 成基 12, 30
法政大学社会学部教授

ど い ふみひろ
土井 文博 15
熊本学園大学商学部教授

つつ い じゅんや
筒井 淳也 17
立命館大学産業社会学部教授

えん どう とし み
遠藤 知巳 18
日本女子大学人間社会学部教授

や の よしろう
矢野 善郎 20, 45
中央大学文学部教授

ほそ がや のぶ こ
細萱 伸子 22
上智大学経済学部准教授

りゅうおう たか よし
流王 貴義 23
東京女子大学現代教養学部特任講師

す ど なおき
数土 直紀 24, 39
学習院大学法学部教授

こ やぶ あきお
小藪 明生 25
早稲田大学文学学術院非常勤講師

なかにし ゆう こ
中西 祐子 26
武蔵大学社会学部教授

さきやま はる お
崎山 治男 27
立命館大学産業社会学部准教授

みや もと しん や
宮本 真也 28
明治大学情報コミュニケーション学部准教授

さとう しゅんき
佐藤 俊樹 29, 51
東京大学大学院総合文化研究科教授

きつ かわ とおる
吉川 徹 31
大阪大学大学院人間科学研究科教授

で ぐち たけ し
出口 剛司 32, 61
東京大学大学院人文社会系研究科准教授

ふじおか まさゆき
藤岡 真之 34
弘前学院大学社会福祉学部准教授

み かみ たけ し
三上 剛史 35
追手門学院大学社会学部教授

とみなが きょう こ
富永 京子 36
立命館大学産業社会学部准教授

ほりかわ さぶろう
堀川 三郎 37
法政大学社会学部教授

いまだ たかとし
今田 高俊 38
東京工業大学名誉教授

ほんだ かずひさ
本田 量久 40
東海大学観光学部准教授

あか がわ まなぶ
赤川 学 41
東京大学大学院人文社会系研究科准教授

こい どあきひろ
小井土彰宏 42
一橋大学大学院社会学研究科教授

ひらの たかのり
平野 孝典 43
桃山学院大学社会学部専任講師

かね こまさひこ
金子 雅彦 46, 47
防衛医科大学校医学教育部准教授

むろ いけんじ
室井 研二 48
名古屋大学大学院環境学研究科准教授

これなが ろん
是永 論 49
立教大学社会学部教授

と い たかよし
土井 隆義 50
筑波大学人文社会系教授

しだき よし
志田基与師 52
横浜国立大学大学院環境情報研究院教授

た ろうまる ひろし
太郎丸 博 53
京都大学文学系教授

わたらい ともこ
渡會 知子 54
横浜国立大学国際総合科学部准教授

こ やま ゆたか
小山 裕 55
東洋大学社会学部准教授

むらい しげき
村井 重樹 57
島根県立大学総合政策学部専任講師

しらとり よしひこ
白鳥 義彦 58
神戸大学大学院人文学研究科教授

そのだ しげと
園田 茂人 59
東京大学東洋文化研究所教授

は が まなぶ
芳賀 学 60
上智大学総合人間科学部教授

いじま ゆうすけ
飯島 祐介 62
東海大学文学部准教授

みずかみ てつお
水上 徹男 63
立教大学社会学部教授

うつみ ひろふみ
内海 博文 64, 70
追手門学院大学社会学部准教授

ひぐち こういち
樋口 耕一 65
立命館大学産業社会学部准教授

さわ い あつし
澤井 敦 66
慶應義塾大学法学部教授

さか ぐち ゆうすけ
阪口 祐介 67
桃山学院大学社会学部准教授

目 次

第 I 部 社会学の方法

1	「社会」の発見と社会学の誕生	友枝 敏雄	2
2	社会的事実	友枝 敏雄	4
3	存在と当為	友枝 敏雄	6
4	方法論的個人主義と方法論的集合主義	友枝 敏雄	8
5	統計帰納法, 数理演繹法, 意味解釈法	友枝 敏雄	10
6	概念構成と命題構成	友枝 敏雄	12
7	理論研究と実証研究	友枝 敏雄	14
8	内在的批判と外在的批判	友枝 敏雄	16

第 II 部 概念構成——概念によって社会をとらえなおす

ミクロ社会学

9	自我と自己	浅野 智彦	20
10	行為類型	浜 日出夫	24
11	地位と役割	花野 裕康	28
12	パターン変数図式	佐藤 成基	32
13	社会化	花野 裕康	36
14	日常生活世界	浜 日出夫	40
15	自己呈示と相互行為儀礼	土井 文博	44

16	エスノメソドロジー	浜 日出夫	48
17	エイジェンシーと構造	筒井 淳也	52
18	言語行為と言説	遠藤 知巳	56

メゾ社会学

19	基礎集団と機能集団	山田真茂留	60
20	支配と権力	矢野 善郎	64
21	官僚制と近代組織	山田真茂留	68
22	フォーマル・グループとインフォーマル・グループ	細 萱 伸子	72
23	アノミーと同調・逸脱	流王 貴義	76
24	信 頼	数土 直紀	80
25	社会関係資本	小藪 明生	84
26	近代家族とジェンダー	中西 祐子	88
27	感情労働と疎外	崎山 治男	92
28	社会的承認	宮本 真也	96

マクロ社会学

29	規範と制度	佐藤 俊樹	100
30	構造と機能	佐藤 成基	104
31	階級・階層と社会移動	吉川 徹	108
32	大衆社会	出口 剛司	112
33	伝統指向・内部指向・他者指向	浅野 智彦	116
34	消費社会	藤岡 真之	120
35	公共性と市民社会	三上 剛史	124

36	社会運動	富永京子	128
37	受益圏と受苦圏	堀川三郎	132
38	正義	今田高俊	136
39	リベラリズムとコミュニタリアニズム	数土直紀	140
40	エスニシティとナショナリズム	本田量久	144
41	家父長制とフェミニズム	赤川学	148
42	資本主義と世界システム	小井土彰宏	152

第Ⅲ部 命題構成——社会のメカニズムとトレンド

メカニズム

43	社会統合と自殺	平野孝典	158
44	集団の拡大と個性の発達	浜日出夫	162
45	合理化のパラドクス	矢野善郎	166
46	相対的剝奪と準拠集団	金子雅彦	170
47	予言の自己成就	金子雅彦	174
48	顕在機能と潜在機能	室井研二	178
49	認知的不協和	是永論	182
50	ラベリング	土井隆義	186
51	秩序問題	佐藤俊樹	190
52	社会変動の機能主義的説明	志田基与師	194
53	合理的選択と社会的ディレンマ	太郎丸博	198
54	複雑性の縮減	渡會知子	202
55	社会の機能分化	小山裕	206


56	地位の一貫性・非一貫性と政治的態度	友枝 敏雄	210
57	ハビトゥスと文化的再生産	村井 重樹	214

トレンド

58	機械的連帯から有機的連帯へ	白鳥 義彦	218
59	近代化	園田 茂人	222
60	世俗化	芳賀 学	226
61	啓蒙の弁証法	出口 剛司	230
62	生活世界の植民地化	飯島 祐介	234
63	想像の共同体と伝統の創造	水上 徹男	238
64	文明化	内海 博文	242
65	情報化	樋口 耕一	246
66	個人化	澤井 敦	250
67	リスク社会	阪口 祐介	254
68	再帰的近代化	山田真茂留	258
69	液状化	山田真茂留	262
70	ハイブリッド・モダンとグローバル化	内海 博文	266

引用文献	271
事項索引	289
人名索引	298

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。



第 I 部
社会学の方法

1 「社会」の発見と社会学の誕生

「社会」の発見

社会学は近代西欧の胎内で生まれた。「社会」の発見とは、近代西欧において、自然現象と異なるものとして社会現象が認識されるようになったことを意味する。近代以前の社会では、洋の東西を問わず、自然と社会は未分離であり、それゆえ自然現象にも社会現象にも根本において同一の原理や法則が働いていると考えられていた。西洋では、万物の根源を水（タレス）や火（ヘラクレイトス）に求めた古代ギリシャの自然哲学がその典型である。古代中国では、儒家思想の中核にあった天命という概念が、その人の運命と森羅万象の条理とを意味していたことに明らかなように、自然の秩序と個人の運命とは同じ認識枠組みでとらえることができるという理論的同型性が前提にされていた。

近代の起源

西欧における近代の起源をどの時点に求めるかについては、いくつかの説がある。古い順から挙げてみよう。もっとも古いのは、ルネッサンス（14世紀から16世紀）と宗教改革（16世紀）である。第2はピューリタン革命（1642-1649年）から王政復古（1660年）を経て名誉革命（1688年）に至るイギリス市民革命であり、第3はバスティーユ監獄の襲撃（1789年）に象徴されるフランス革命である。第4は19世紀後半におけるイタリア王国の成立（1861年）およびドイツ帝国の成立（1871年）に求めるものである。

このように西欧の近代の起源には、400年から500年の幅があるから、西欧の歴史においても前近代と近代とを截然と時代区分することは難しい。しかし市民革命および産業革命（＝資本主義の生成）が新しい社会誕生の原動力になったと考えるならば、イギリスで産業革命が始まり、フランス革命が起こった18世紀後半を近代の起源とすることが、一つの有力な考え方になる。

社会科学および社会学の誕生

自然現象と異なる社会現象独自のメカニズムを発見しようとする姿勢が、社会科学および社会学の誕生につながっていく。社会現象独自のメカニズムとは、社会現象における規則性ということもできる。たとえば、個人は自由に服装を

選択しているにもかかわらず、他人と似たようなファッションになってしまうこと、あるいはここ数十年、日本ではバレンタインデーに女性から男性にチョコレートを贈る行事が定着したことは、ある時代もしくはある社会の人々の行動様式に共通性があることを示しており、社会現象の規則性の典型例である。こうした社会現象における規則性は、さまざまな人間の活動の集積として生み出されるものであるから、規則性を変更すれば、社会を作り変えることも可能だという認識が生まれるようになった。社会および制度が変更可能である、あるいは制御可能であるという認識こそが、近代における社会科学の勃興をもたらしたのであった。このような近代固有の認識を、日本政治思想史の泰斗である丸山真男は、「自然に対する作為の契機」の優位と呼んでいる（丸山 1952）。

以上の観点をふまえて、近代における政治学、経済学、社会学の始祖を求めらば、政治学では『君主論』（Machiavelli 1532 [訳 2004]）を著したマキアヴェリ（1469-1527）もしくは『リヴァイアサン』（Hobbes [1651]1992 [訳 1971]）を著して社会契約論を提唱したホッブズ（1588-1679）、経済学は『諸国民の富』（Smith [1776]1950 [訳 1969]）を著したアダム・スミス（1723-1790）になるであろう。それでは社会学の始祖は誰であろうか。この問いに対しては、「社会学（sociologie）」という言葉を提唱し、19世紀前半にフランスで活躍したコント（1798-1857）になるといってよい。

政治学・経済学に比べて社会学の誕生が遅れた理由としては、政治学、経済学がそれぞれの研究対象として、政治権力、資本主義の生成に伴う市場という明確な対象をもっていたのに対して、社会学が人間の活動の集積としての社会もしくは「社会的なるもの（the social）」を総体としてとらえようとするからだと考えられる。つまり社会そのものが、いわば自明性をもって人々に大きな影響を与え、人々がその自明性から逃れられなくなったときに、社会学は誕生するのである。コントもまた、フランス革命で混乱し将来社会の方向性が見えなくなった時代に、科学の進展に裏打ちされた秩序ある社会の理想の姿を提示しようとして、社会学を構想したのであった。

社会学が「社会秩序探究の学」もしくは「近代の自己認識の学」といわれる理由は、ここにある。

〔友枝敏雄〕

2 社会的事実

創発特性

社会的事実とは、19世紀末から20世紀初頭にかけてフランスで社会学の確立に貢献したデュルケムの言葉である。

社会学の研究対象は、いうまでもなくさまざまな社会現象であるが、これを少し難しく表現すると「社会的なるもの (the social)」ということになる。「社会的なるもの」という場合に社会学者が注目してきたのは、社会現象には個人の行為を超えた何かがあるということである。つまり社会現象には、単なる個人の行為の総和ではないもの、個人の行為からは説明できない何か異なる性質が発生するということである。

この異なる性質のことを、進化論や一般システム論では創発特性と呼ぶ。創発特性 (emergent property) とは、「ある部分ないし要素が一定量を超えて集まるときに発現する集合体自体の性質であり、各部分ないし各要素には還元できない集合体独自のもの」と定義できる。創発特性という概念によって説明しようとしている現象は、かつて弁証法哲学でいわれていた「量から質への転化」が説明しようとした現象とほぼ同じものだといってよい。

デュルケムと『社会学的方法の規準』

『社会学的方法の規準』(Durkheim 1895 [訳 1978])におけるデュルケムの主張を敷衍すると、次のようになる。たとえば、水 (H_2O) という性質は分子によって説明できるが、原子のレベルにまでさかのぼって水素原子と酸素原子の性質から説明することはできないということになる。このことを社会的な現象で考えてみよう。たとえば家族は赤の他人である男性と女性によって作り出される。多くの場合、ライフステージを通してその家族独特の雰囲気醸成される。とくにその家族が俸給生活者ではなくて、農業、漁業、商家、町工場といった自営業主である場合には、家風というものが強く生み出される。ある家族の中に生まれる子どもにとっては、その家庭の雰囲気はたまたま両親が作り出したものであるにもかかわらず、必然的なもの、もしくは変更しがたいものになってしまうのである。

このような社会現象自体が有する創発特性を、デュルケムは社会的事実と呼んだ。彼によれば、社会的事実とは、われわれの意識の外部にあって、しかもわれわれの行為を拘束するもののことである。社会的事実を平易に表現するならば、次のようになる。私たちの行為の中には、なぜそうしなければならないのか、明確な理由が行為者にはわからないにもかかわらず、行為者がそうしなければならないと感じ、そのように行う行為があるが、この行為がまさしく社会的事実なのである。デュルケムは、社会的事実の具体例として、法や道徳、慣習、宗教教義、社会的潮流などを挙げている。また彼は、社会的事実を有機体的な現象および心理的な現象とは異なるものとしてとらえていたから、この社会的事実には、社会学という学問の独自性を求めていたといつてよい。

創発特性もしくは社会的事実の注目すべき事例として、20世紀の忌まわしい歴史である、ドイツにおけるナチスによるユダヤ人虐殺がある。いうまでもなく、一人ひとりのドイツ人が狂気の状態にあったわけでもないのに、なぜあのような事態が起きてしまったのか。一つの解釈として、第一次世界大戦での敗戦によって、当時のドイツ人に「自由からの逃走」をもたらすような社会的性格が生み出されたのではないかというものがある（Fromm 1941 [訳 1951]）。もちろんこの解釈は事態のすべてを説明するものではない。しかし当時のドイツ社会を覆っていた「空気」があり、これこそが社会的事実なのである。

社会学的分析の対象としての社会的事実

デュルケムが提示した社会学の方法を、あえて極端な形でとらえるならば、社会現象を個人の行為の総和から説明することはできないとする立場にいきつく。社会学の方法の独自性が、社会的事実への注目にあることは否定できない。しかし、その一方で個人の行為を出発点にして、集合的な現象を説明しようとする研究も、社会学の世界ではずっと続けられてきた。その代表が、合理的選択理論に依拠して、集合的な行為・現象を説明する試みである。

社会現象を分析する際に、個人を出発点とするのか、それとも社会を出発点とするのかという「個人と社会」の問題は、社会学誕生以来のテーマである。このテーマは20世紀後半以降、マイクロ-マクロリンク問題として再定式化されたうえで研究が進展しているが、社会学という学問に内在する永遠のアポリアというべきものである。

〔友枝敏雄〕

10 行為類型

ヴェーバー

社会学における行為理論の出発点に立つのはヴェーバーの行為理論である。ヴェーバーは、「行為」を「単数あるいは複数の行為者が主観的な意味を含ませている限りの人間行動」(Weber 1922b [清水訳 1972: 8])と定義する。「行為」とは主観の意味、すなわち行為者本人にとって何らかの意味をもつものであり、この点で行為者本人にとって意味をもたない「行動」とは区別される。そして「単数あるいは複数の行為者の考えている意味が他の人々の行動と関係をもち、その過程がこれに左右される」(Weber 1922b [清水訳 1972: 8])とき、そのような行為は「社会的行為」である。ヴェーバーによれば、あらゆる社会現象は諸個人の社会的行為の集まりであり、諸個人の社会的行為に分解できる。そして、ヴェーバーは、社会的行為が行為者自身にとってもっている主観の意味を基準として、社会的行為を「目的合理的行為」「価値合理的行為」「感情的行為」「伝統的行為」の4種類に分類する。

目的合理的行為は、事態のなりゆきや他者の行動を予想し、その予想を自分の目的を実現するための手段として利用する行為、価値合理的行為は、結果を度外視して、行為そのもののもつ価値への信仰によってなされる行為、感情的行為は感情や気分による行為、伝統的行為は身についた習慣による行為である。ただしこれらはあくまで純粋な類型(理念型)であり、現実の行為はこれらの類型にさまざまな程度で近似しているにすぎない。

功利主義では、人間は合理的な手段を用いて自己の利益の最大化を追求する存在としてとらえられている。このような人間像は「ホモ・エコノミクス(経済人)」と呼ばれる。ホモ・エコノミクスの行為は目的合理的行為の典型的な例である。これに対して、ヴェーバーは人間を経済的な利益を追求するだけの存在としてはとらえない。たしかに人間は自分の利害のために目的合理的に行為する。だがときには自分の利害を度外視して理想の実現のために行為することがある。人間を単に利害に駆られて行為する存在としてとらえるのではなく、ある場合には理想が人間を突き動かすこともあると考えるところに、社会学的

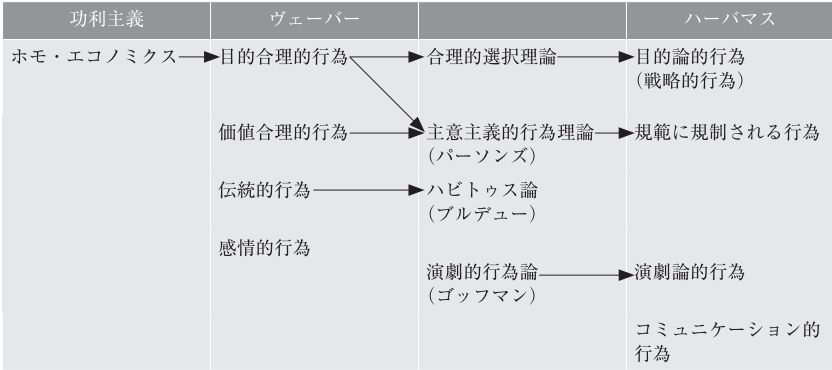


図1 社会学的行為理論の系譜

な人間像の特徴はある。ヴェーバーの価値合理的行為はこのもう一つの側面を概念化したものである。世俗的な欲望を断念して、神の意志を実現するための道具として禁欲的に労働したプロテスタントたちの行為が歴史のコースを切り替え、ついには資本主義を生み出したことを論じたヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』はこのような社会学の人間像をよく表している。

ヴェーバー以降の行為理論の展開をあらかじめ図1に示しておこう。

パーソンズ

ヴェーバーの行為理論を受け継ぎ、それを行為の一般理論として体系化したのはパーソンズであった。パーソンズは、大著『社会的行為の構造』(Parsons 1937 [訳1974-89])において、行為理論の歴史を大きく実証主義的伝統と理想主義的伝統に分けたうえで、この2つの伝統が収斂する地点に自らの行為理論を位置づけ、これを「主意主義的行為理論」と名づけた。

パーソンズは社会を構成する基本的な単位を「単位行為」と呼ぶ。そして、単位行為を構成する要素として「条件 C」「手段 M」「目的 E」「規範 N」を挙げている。これを用いれば、3つの行為理論はそれぞれ次のような関数として表記できる(厚東 1980: 76-77)。

- 実証主義的行為理論 $A_p = f(C)$
- 理想主義的行為理論 $A_i = f(N)$
- 主意主義的行為理論 $A_v = f(C, M, E, N)$

実証主義的行為理論では条件的要素が強調され、極端な場合には行為は条件への適応に還元されてしまう。理想主義的行為理論では規範的要素が重視され、極端な場合には行為は条件を無視した観念の遊戯と化してしまう。主意主義的行為理論と、そしてこの点においては功利主義においても、行為は、一定の条件の中で、何らかの規範によって制約されつつ、特定的手段を用いて目的の達成をめざすものとしてとらえられる。功利主義と主意主義的行為理論の違いは、功利主義が合理性の規範しか知らないのに対して、主意主義的行為理論では合理性の規範と価値の規範の両方の規範に従って目的の選択と手段の選択がなされるととらえているところにある。ここには人間を利害と理想の両方によって突き動かされるものとするヴェーバーの人間観が継承されている。

ハーバマス

ハーバマスは名著『コミュニケーション的行為の理論』(Habermas 1981 [訳1985-87])において、彼以前のさまざまな行為論をふまえて、行為を「目的論的行為」「戦略的行為」「規範に規制される行為」「演劇論的行為」「コミュニケーション的行為」に分類している。

目的論的行為とは「行為者が一定の状況のもとで効果を期待できる手段を選択し、適切な仕方での手段を用いることによって、一つの目的を実現する、あるいは望ましい状態への到来を促す」(Habermas 1981 [訳1985(上): 132])ものである。これはヴェーバーの目的合理的行為に対応するものである。

戦略的行為は目的論的行為の一種であるが、他者の選択を計算に入れながら、あるいは他者の選択に影響を与えることによって、自己の目的の実現をめざすものである。これは、自己の利益を最大化するために他者の出方を計算に入れつつ戦略的に手段を選択する、合理的選択理論が前提としているような行為に対応している。

規範に規制される行為とは「共通の価値に照らして行為する社会的集団のメンバーにかかわる」(Habermas 1981 [訳1985(上): 132])ものであり、集団のメンバーは集団の中で妥当している規範に一致する行為を互いに相手に対して要求する。これはパーソンズの主意主義的行為理論が強調した、共有された価値規範に従って目的と手段の選択を行う行為に対応している。

演劇論的行為はゴッフマンが注目した演技としての行為に対応しており、

「たがいに観衆となり，観衆の目前で自己を表現する相互行為の参加者に関係をもつ」(Habermas 1981 [訳 1985(上): 133]) ものである。

ハーバマスはこのように彼以前の主要な行為理論を4つの行為類型として整理し直したうえで，彼独自の行為類型としてコミュニケーション的行為を導入する。コミュニケーション的行為とは，言語を媒介として自己と他者との間で相互了解をめざして行われる相互行為である。コミュニケーション的行為においては，話し手は，自分の発言が客観的事実と一致しているという「真理性」の主張，集団の規範に照らして正当であるという「正当性」の主張，発言しているとおりのことを思っているという「誠実性」の主張を掲げて，聞き手に向かって何ごとかを言う。聞き手はこれらの主張を承認することもできるし，それらに異議を唱えることもできる。後者の場合，話し手は主張の根拠をさらに説明して合意をめざす。

たとえば，ハーバマスが挙げている例を借りると（少し手を加えてある），教授が講義中に学生に対して「水を1杯もってきてくれないか」と言う場合，学生はこの要求の妥当性を受け入れることもできるが，次のように異議を唱えることもできる。第1に，「今日は断水です」と言って，その発言の真理性を問題にすることができる。第2に，「教授が学生にそのような要求をするのはハラスメント行為にあたります」と言って，その正当性を拒否することもできる。あるいは「先生は水を飲みたいのではなく，本当は私を試そうとしているのではないですか」と言って，その誠実性を問うこともできる。このように要求の妥当性が問題にされたら，教授は「自動販売機の飲み物でもいいから」「いますぐ薬を飲まなければいけないのだ」「しゃべりすぎて本当にのどが渇いているのだ」などと，水もってきてほしいという自分の要求がなぜ妥当なのかをさらに説明して合意をめざす。もし「お金を払うから」あるいは「単位がどうなっても知らないよ」と言うなら，それはもはや合意をめざすコミュニケーション的行為ではなく，自分の目的の実現のために貨幣や権力を用いて相手の選択を操作しようとする戦略的行為である。

ハーバマスによる戦略的行為とコミュニケーション的行為の対比のうちにも，ヴェーバー以来の利害と理想の対比が受け継がれている。

〔浜日出夫〕

68 再帰的近代化

近代化は伝統社会から単純な近代へ、そして単純な近代から再帰的な近代へという2段階で展開してきた。再帰的近代の段階では、社会活動全般が、それに関して新たに得られた情報や知識によって絶えず検討・改善され、その結果として当の営みがそれ自体、大きな変貌を遂げることになる。

近代化の近代化

合理化、機能主義化という意味での近代化の力強さが堅く信じられていた時代がたしかにあった。そもそも社会学は、その意味での近代化に伴って社会がどのように変貌していくのかを探究するため、新たに開発された学問であるといっても過言ではない。機能的合理化には、未来の見通しをよくし、効率性を高めながら自由と平等を拡張するというポジティブな側面がある。またその反面、手段的な便益の側面ばかりが強調されると、自由も平等も低減しかねないというネガティブな側面も認められよう。ただ、古典的な社会学は、このいずれの側面に注目するにせよ、合理主義や機能主義を近代社会の堅固な原理と考えるという点では共通していた。

ところが合理化ないし機能主義化の力はあまりにも強すぎるため、それが先鋭化すると、いつしかその矛先が近代の基盤たる合理性や機能に、すなわち自ら自身へと向かってくることになる。ここに生起するのが再帰的近代化という事態にほかならない。近代人は伝統や呪術や神の掟から自らを解き放ち、合理的な思考をめぐらせて機能的に社会を編成し直してきた。そこで礎となっていたのが近代的な理性である。では理性それ自体が合理化され、近代的なるものがさらに近代化されると、いったいどのようなことになるのであろうか。この新しい課題に精力的に取り組んだ代表的な社会学者が、ベックやギデンズだ。

単純な近代から再帰的な近代へ

ベックは近代化の過程を伝統社会から産業社会へ、そして産業社会からリスク社会へという2段階でとらえる (Beck 1986 [訳1998])。初期の単純な近代化は、なるほど人々を旧来型の地縁や血縁をもとにした諸々の制度から解き放

ったが、新たに近代社会を支えることになった階級にせよ核家族にせよ職業労働にせよ、そこには伝統的な要素がかなり混入しているとベックは見る。そしてそれをさらに近代化するというのが、次なる時代の流れだ。この近代化の徹底によって、近代産業社会の基盤たる階級的、核家族的、職業労働的な集合性は大きく揺らぎ、そこから伝統によっても産業によっても守られる保障のない個人が析出してくる。家庭や会社に縛られる可能性が低くなるということでは、この個人化の過程はある種の解放にほかならないが、他方、個人として離婚や失業のリスクをつねに感得せざるをえないような状況になったということで見ると、それは人々に独特の緊張を強い、また相当な重圧を課すものともいえる。脱近代なるものが専ら明るいイメージで語られていた1980年代半ばの時点で、離婚に伴うリスクや雇用の流動化の問題点などに関して鋭い洞察をめぐらせたベックの議論は、きわめて先進的なものであった。

ところで、ベックは初期の産業社会を単純な近代とみなし、またその後のリスク社会を再帰的近代の段階と見ているわけだが、後者においてただ単に産業社会にも残存していた伝統的な諸要素が払拭されたというだけなら、それは近代化がさらに進展したというにすぎず、再帰性という概念をあえて持ち出す必要はない。ではベックが再帰的近代という言い方をするとき、そこにはどのような意味が込められているのであろうか。ベックによれば、近代化が進むことで、意図しないまま近代化それ自体に起因する新たな問題が現出する。雇用問題も環境問題も核廃棄物問題も近代固有の課題にはほかならない。近代化は伝統社会を切り崩すとともに、自ら自身をも近代化するという意味で再帰的な作用を見せる。そしてこれにより社会的な枠組みは大きく転換し、思いもよらなかった問題の数々が噴出することになったわけである。

再帰性の徹底

近代を2つの段階に分けてとらえるのはギデンズの場合も同様である(Giddens 1990 [訳1993])。近代初期においては伝統性や宗教性が理性によって打破されていったが、人々はまさにその理性の存在とその力を確信することができた。ところが理性それ自体を合理化する再帰的な力が見境もなく働くと、因習・習俗・教理といったものだけでなく科学的な知識さえもが特権的な立場を失い、あらゆるものが疑義や吟味や修正の対象となってくる。こうして前近

代にも近代初期にも健在であった基礎づけ志向は極端に衰微し、また歴史の進歩イメージも大きく揺らぐことになった。だが、この新たな時代の位相を脱近代と呼ぶことに、ギデンズは強く反対する。近代とはまったく異質な時代が立ち現れたというわけではなく、むしろ近代的な合理化の作用が再帰的に徹底するような時代になったという点に着目したギデンズは、これを専らハイ・モダニティという言葉で表現している。

ギデンズの論じるハイ・モダニティにおいて再帰性というのは非常に重要な概念だが、それは行為の水準でも制度の水準でも用いられうる。また再帰的な営みは、散発的な出来事にとどまる場合もあれば執拗に繰り返される場合もある。人が自らの振る舞いを反省的に構築・再構築するというのであれば——これをギデンズは「行為の再帰的モニタリング」と呼ぶ——、それは時代や文化を超え、あらゆる行為に認めることができる。これに対し、とりわけ近代に特徴的なのは、そうした再帰性が徹底的に作用し、それゆえ社会活動全般が再帰的なとらえかえしの対象となってくる点にほかならない。ここでは社会的な営みが、それに関して新たに得られた情報や知識によって絶えず検討・改善され、その結果として当の営みがそれ自体、大きな変貌を遂げることになる。

ギデンズはモダニティのダイナミズムの特徴として、①時間と空間の分離、②脱埋め込みのメカニズム、③制度的な再帰性の3つを挙げた（Giddens 1990 [訳 1993]; 1991 [訳 2005]）。まず時間と空間が特定の状況に依存しながら結びついていた伝統社会とは違って、近代社会においてはこの2つが分離し、それぞれ標準化された様相を呈するようになる。第2に近代社会は、象徴的通標や専門家システムといった抽象的なシステムを展開することで、相互行為をローカルな文脈から切り離す。そして第3に、社会生活の組織化と変容のために情報と知識を再帰的に用いることが制度化され、これによって近代社会ではいかなる事象も固定的にとらえることができなくなってきた。

この第3の点に関してとくに重要なのは、ハイ・モダニティにおいて重視されている情報や知識が確固たるものとしては存在していない、ということである。近代も初期の段階では理性の存在が確実なものとして信じられていた。ところが再帰性が徹底することで知識の確実性は掘り崩されてしまう。現代社会では情報や知識がきわめて大きな役割を果たすが、それは日々刷新されてお

り、その意味で社会的意味世界を支える固定的な礎とはなりえないのである。

自己と関係性の再帰的とらえかえし

このようにハイ・モダンの時代にあって再帰的な合理化の力はきわめて強力だが、その作用は自己や関係性といった身近な領域にまで及ぶ（Giddens 1991 [訳 2005]; 1992 [訳 1995]）。ギデنزによれば自己アイデンティティは、生活史の観点から本人自身によって再帰的に理解された自己のことだ。そしてその自己は、自身がそのありようについて責任をもち、また自らで構成・再構成していくという意味で「再帰的なプロジェクト」となる。自分探し、自己実現、心理療法、セクシュアリティ、ダイエット、拒食症など、いずれも今日における心理的・身体的な自己の再帰性の問題としてとらえることができよう。

またギデنزのいう「純粋な関係性」とは、既存の制度や組織に頼ることなく、ひたすら関与者自身の真正な思いのみによって成立するもので、次のような特徴をもつとされる。①社会的・経済的生活の外的諸条件に依存しない、②関与者たちの関心のためにのみ維持される、③反省的（再帰的）かつ開放的な形で組織化される、④外的な絆ではなくコミットメントが重要となる、⑤親密性に焦点が当てられる、⑥獲得的な相互の信頼が基盤となる、⑦アイデンティティは親密性の発展の中で彫琢されていく。つまり今日的な「純粋な関係性」は、当事者たち自身による絶え間ない検証と修正にさらされ、そこにおいて真正と認められる場合に限って存続するものである。そこには再帰的な働きの極致を見ることができよう。

再帰的近代化の議論には、自己や関係性に関するギデنزの探究のように、知的な反省的とらえかえしの過程を主たる対象に含み込むものもあれば、ベックのようにそれを認めず、近代化それ自体の近代化によって生じる意図せざる自己解体や自己危害の問題に焦点を絞るものもある。また、スラム街の母親にとってその生活はどの程度構造から解放されているか——つまりどれほど再帰的か——というスコット・ラッシュが提起した疑義も、再帰的近代化論が見落としてはならない大切なポイントに違いない（Beck, Giddens, and Lash 1994 [訳 1997]）。今日的な再帰性のありようを多面的に読み解いていくことは、社会学的現代社会論にとってきわめて挑戦しがいのある課題といえることができよう。

（山田真茂留）

◆ 編者紹介

友枝 敏雄 (ともえだ としお)

現在 大阪大学未来戦略機構特任教授

主著 『モダンの終焉と秩序形成』有斐閣, 1998年。『リスク社会を生きる若者たち——高校生の意識調査から』(編著)大阪大学出版会, 2015年。『社会学のエッセンス——世の中のしくみを見ぬく(新版補訂版)』(共著)有斐閣, 2017年

浜 日出夫 (はま ひでお)

現在 慶應義塾大学文学部教授

主著 『社会学』(共著)有斐閣, 2007年。『社会理論と社会システム』(共編著)中央法規出版, 2009年。『被爆者調査を読む——ヒロシマ・ナガサキの継承』(共編著)慶應義塾大学出版会, 2013年

山田真茂留 (やまだ まもる)

現在 早稲田大学文学学術院教授

主著 『〈普通〉という希望』青弓社, 2009年。『Do! ソシオロジー——現代日本を社会学で診る(改訂版)』(共編著)有斐閣, 2013年。『集団と組織の社会学——集合的アイデンティティのダイナミクス』世界思想社, 2017年

社会学の力——最重要概念・命題集

Sociology: Concepts and Propositions

2017年6月10日 初版第1刷発行

	友 枝 敏 雄
編 者	浜 日 出 夫
	山 田 真 茂 留
発 行 者	江 草 貞 治
発 行 所	株 式 有 斐 閣

郵便番号 101-0051
東京都千代田区神田神保町 2-17
電話 (03) 3264-1315 [編集]
(03) 3265-6811 [営業]
<http://www.yuhikaku.co.jp/>

印刷・株式会社暁印刷／製本・大口製本印刷株式会社
© 2017, Toshio Tomoeda, Hideo Hama, and Mamoru Yamada.
Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示しております。

ISBN978-4-641-17430-6

JCOPY 本書の無断複写(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に、(社)出版者著作権管理機構(電話03-3513-6969, FAX03-3513-6979, e-mail: info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。